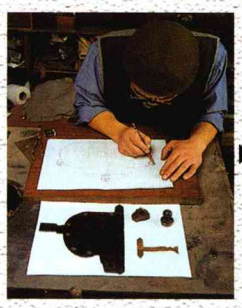
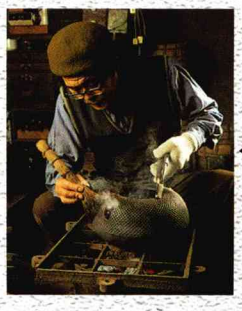
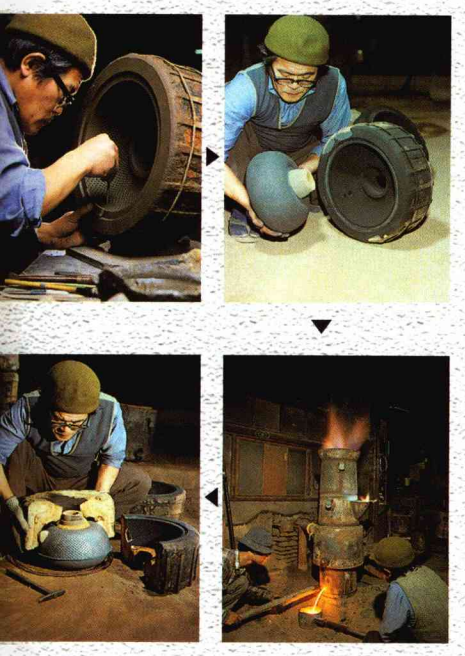
鉄瓶　南部形馬紋

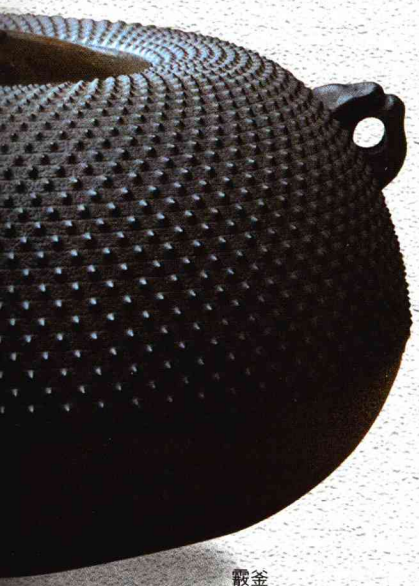




Steel 鉄の点景 Landscape

侘(わ)びを感じさせる鋳肌の味わいに、漆とおはぐろで独特の艶を与えた南部の鉄器は、伝統工芸品として、また日用の道具としても、いまや世界的に流通するようになった。盛岡には大小約20ほどの鉄器工場があり、年間出荷額は30億円をこえるという。そしてもうひとつ、鋳物のふるさと南部は、近代鉄鋼業発祥の地でもある。南部鉄器の伝統の技に注目しつつ、南部に培われてきた鉄の歴史と風土とに思いを馳せてみたい。





霰釜

近代への礎となった鉄——

南部鉄器（なんぶてっき）

手づくりの鋳型から生まれる工芸品

「こしき」に火が入って3時間。炉内の温度は1300～1400℃に上昇している。炉の中には、コークス、銑鉄、石灰石の層が幾層かにわたって、積み上げられている。下から吹き上げるコークスの炎と石灰石の天井に挟まれた銑鉄が、温度の上昇とともに滴下して「こしき」の底の部分に溜まっていく。やがて「湯出し口」が開かれると、溶鉄は黄橙色の輝きを発する灼熱の流れとなって迸（ほとばし）る。

この1400℃の「湯」を、職人は「とりべ」とよばれる柄杓（ひしゃく）で受け、次々と鋳型に流し込んでいく。南部鉄器づくりの作業の中でも、もっともドラマティックといわれるのが、この鋳込みの瞬間である。手づくりの型の中に溶鉄がゆきわたり、固まる——熱く光を放つ流動物が、ふいの間に「形」となり、強烈な存在を主張する何者かとして現前してくる瞬間である。

南部鉄瓶の型は「実型（さねがた）」と呼ばれる素焼きの器の内側に、川砂、粘土、埴汁（はじる）を塗り固めてつくられる。実型の外見はちょうど七輪を輪切りにしたような偏平な円筒で、上・下で組み合わされるようになっている。鋳型全体としては素焼きの実型の中に砂型が入れ込まれているといったイメージだろうか。砂型の部分は鉄瓶の断面を写した「木型」を回転させながらつくる。数学で出てくる回転体の要領である。

荒挽き・中挽き・真土（まね）挽きと3段階をへて塗り込められた胴型には次いで「紋様押し」が行われる。絵柄の場合は下絵を水で張りつけヘラで押しながら絵を描いていく。「あられ」とよばれる細かなつぶ模様は「あられ棒」で手押ししていく。型の仕上げには肌に味わいを与えるための「肌打ち」が加えられる。砂を埴汁で団子にしたものを型に押しあてたり、布タンポや筆などで「寂び」のある落ちついた肌を整えるのである。

上下の型が出来上がったら、中子を合わせる。釜や鉄瓶の内側の空洞になる部分である。中子は焼砂と埴汁を混ぜたものを鋳型の中でつき固めて成形し、離型のために炭を埴汁でといた「黒味」を塗り、さらに炭火で炙って「脱気（だっき）取り（水分を除く作業）」をする。こうしてできた中子と、胴型・尻型を、ちょうど器を逆さに置いた状態で「型合わせ」し、中子が浮

き上がらないように「型持ち」と呼ばれる鉄の小片を尻の部分に挟む。これで鋳型の完成である。出来上がった型は、尻の部分がぽっかりと開いており、ここから「湯」が流し込まれる。固まってから型をこわすと、見覚えのあるあの南部鉄瓶が姿を現すというわけだ。

「型出し」された鉄瓶は「鋳バリ」を落として磨きをかけられ、さらに900℃前後の炭火の中で30分ほど焼かれ酸化被膜がつくられる。――「南部鉄瓶金気なし」と歌われたように湯を沸かしても金気がでず、錆も出にくい鉄瓶が「金気止め」とよばれるこの工程によって生まれる。最後の仕上げは、200～300℃に熱した器に生漆を塗り、さらににおはぐろ（鉄錆を酢酸または茶汁でといたもの）でツヤを抑える。鉄瓶のつるは、専門のつる師によって鍛造され、とりつけられる。まさに手工芸の「結晶」である。

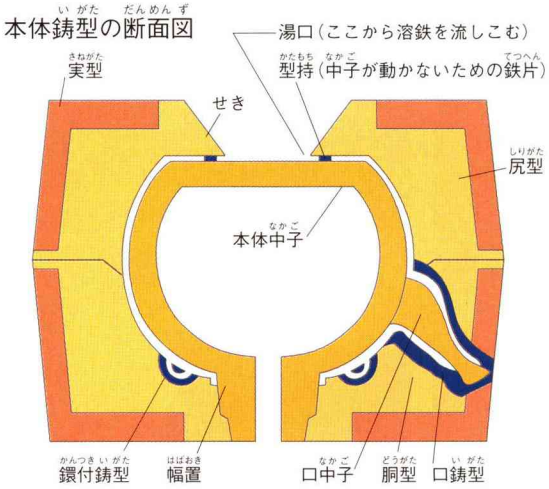
近代製鉄の基礎になった鉄の伝統

南部鉄器は、万治2年（1659年）に南部藩主・重直が京都から招いた「御釜師」小泉五郎七清行から始まるといわれる。もともとこの地には平安時代末期から鉄器づくりの歴史があったが、重直の頃から藩の茶道奨励と御釜師の招聘をきっかけとして鋳物による茶釜づくりが盛んになっていったという。

そそぎ口とつる（取っ手）を備えた、今日にいうような南部鉄瓶を最初につくったのは3代目「御釜師」小泉仁左衛門（1700年代後半）である。仁左衛門は当時流行していた煎茶法の土瓶をヒントに同じものを鋳物でできないかと考え、今にいう南部鉄瓶の原形を創作したようである。呼称も最初は鉄薬罐だった。時代が下るにつれ、呼び名は薬罐釜、手取釜と変わり1845年の文書に初めて鉄瓶という文字が登場してくる。

鉄瓶は藩主の自慢の品となり、各地大名などへの贈答品とされたことで、全国に知られていったようだ。だが庶民の間にまで広く浸透していったのは、明治41年に皇太子（後の大正天皇）が南部鉄器づくりの実演会の場を訪問したことが、きっかけだったといわれる。

戦中は鉄瓶・茶釜などの製造が禁止となり、鉄器工場も転業を迫られたが、一部の職人たちによって、伝統工芸の技術保存という名目で製造方法や匠の技が受け継がれた。



話は変わるが、南部と鉄という2つのキーワードからは鉄に関わる者として忘れられないひとつのストーリーが思い浮かぶ。すなわち釜石鉄山を拠点とする洋式高炉の工業化に国内で初めて成功した南部藩の蘭学者・大島高任に始まる日本近代製鉄技術確立の物語である。高炉そのものの建造では薩摩や北海道が先行していたものの、薩摩は原料供給や需要の問題で工業生産の持続ができず、北海道では高炉そのものが失敗していた。

おなじオランダ語の技術書に学びながら南部の大島高任が成功できたのはなぜだったのだろうか。この点について飯田賢一氏は『鉄の語る日本の歴史』（そしえて刊）の中で、「釜石を含む東北地方の各地が、すでに古代から鉄や金や銅などの鉱産物と、その加工とにおいて、むしろ先進地域であったこと」を指摘している。大島高任にもこうした東北の風土・精神が受け継がれていたことが大きかったということだろうか。近代技術といいつつも、その足元には古くから育まれてきた日本の風土と歴史が土台として存在していたということのようである。

安政元年（1854年）大島高任らが釜石鉄山大橋高炉に火入れをした12月1日という日は、今日「鉄の記念日」として記憶されている。

［取材協力・写真提供：南部鉄器協同組合、盛岡市役所企画部広聴広報課］

盛岡手づくり村

盛岡の手作り工芸品の展示や職人の「芸と技」を見ることのできる地場産業振興のための公開施設。展示資料室や工房などがあり、南部鉄器をはじめ、南部煎餅、家具、陶器、竹細工、わら細工、染め物、木工玩具、菓子など、この地の伝統工芸についてのさまざまな資料や実演を見ることができる。
休村は12月29日～1月3日。

問合せ先：（財）盛岡地域地場産業振興センター　TEL 019-689-2201
盛岡駅から岩手県交通バス利用、繋温泉行または繋経由鶯宿温泉行で盛岡手作り村前下車。車の場合は盛岡インターから約5km、国道46号線沿い。